つくられる「おんな」の身体、「おとこ」の身体
―その歴史的形成過程―

星乃　治彦（福岡大学人文学、
歴史学・ドイツ現代史）

「おんな」の体と「おとこ」の体は様々に表象される。誕生のときに注目されるのは、まずは「おちんちん」である。ただ、最近は発生学的な観点から「ペニス」をもった「おんな」、睾丸を持たない「おとこ」といったインターセックスの問題が注目されるし、同性愛でさえ珍しい存在ではなくなった。そう考えるならば、「性」は本来は不安定なものではないかという問いは有効であろうし、性はますますグラデュエーションで語られるべきものという認識が定着してきている。

こうした認識の基点とも言うべき「人は女に生まれるのではない。女になるのだ」というシモーヌ・ボーヴォワールの1949年『第二の性』のおける宣言は、「なる」の意味を、その社会によって、また歴史によって作られると解釈すれば、社会構築主義や「ジェンダー」の発想の一起点とみなせる。

たしかに、歴史的に「おんな」「おとこ」という「ことば」は、おんなは「優しい」、男は「たくましい」、男は「論理的」・女は「情緒的」等々といった「おんな」「おとこ」の表象を作りだし、それがまた逆に、「雄々しい」、「女々しい」、「女らしい」、「男のくせに」といった、「おんな」「おとこ」を使ったことばを生み出す循環のプロセスが「おとこ」「おんな」を作り出してきた。

ただ、こうした「おとこ」「おんな」の幻想の破壊は容易い。例えば、「ドイツでは？」といった地理的比較や、「江戸時代では？」といった時間的比較をそうした「おんな」「おとこ」は堪えられないからである。そこで、ここでは、現代ないしは近代以降使われている「おんな」「おとこ」が作られたプロセスを、主にヨーロッパを対象に見てみることによって、現在の「おんな」「おとこ」の問題を拾ってみよう。

前近代のヨーロッパにおいて「おんな」「おとこ」は、レオナルド・ダヴィンチ(1452-1519)のスケッチの例に見られるように（図１）、一元論＝ワンセックス・モデルとして捉えられていた。そこでは、「おんな」「おとこ」各々の性器も近似的なものとみなされ、性器が陥没すると「おんな」、隆起すると「おとこ」とされている。それに相応して、前近代の身体を覆う衣服にしても、「おんな」、

「おとこ」の間にそれほどの大きな違いはなかった。（図２）おとこも華美に装い、性器を強調することも多く、ネクタイは首もとから垂らされたペニスへの矢印であった。前近代における実際の性的役割分担にしても、「近代」以降の厳然として差異は確認できず、甲斐甲斐しく、また口やかましく子どもの教育に口を出す父親像も、史料のいたるところに確認できる。

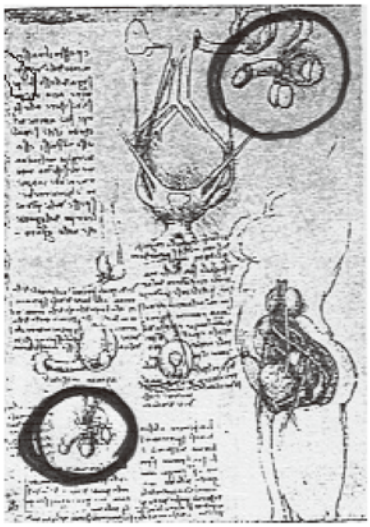

図１　右上が子宮、左下が陰嚢

図２　「おんな」「おとこ」違いが小さい18世紀の衣装

こうした「おんな」、「おとこ」の一元論が大きな転換を迎えたのは、19世紀になってからであった。そこでは、「おとこ」のからだと「おんな」のからだの間の壁は高まり、両者は次第に二元論的に捉えられるようになったのであった。科学

の発展によって、遺伝子をはじめ、「おんな」「おとこ」の「性徴」と見なされる事項は拡大し、性的役割分担にも変化があられるようになる。それまでといえば、農村社会でおんな、おとこ関係なく農耕に従事していた。そこには「おんな」「おとこ」の差異は見つけにくい。いわば「おばあさんは川に洗濯に、おじいさんは山に芝刈りに」の世界であった。

これが近代になって、工業化社会に移行すると、「お父さんはお仕事、おかあさんはおうち」へと転換した。資本主義的価値観によって、「おとこ」＝空間的には「そと」で働く「主人」という役割が割り振られたのに対して、「おんな」には、専ら家事労働に従事する「家内」という役割が与えられ、「おんな」の「おとこ」に対する経済的従属構造が出来上がった。それとともに、それまでは「おんな」「おとこ」の区別なく教育を受けていなかったものが、「おとこ」だけが教育を受けることができるようになり、「おんな」は教育を受けられないまま取り残されることになる。教育を受けた「おとこ」は、政治や経済の仕組みを知り、議論を展開する能力が開発されるようになり、「おとこは論理的」であるという言説が生まれる一方で、教育を受けることができない「おんな」は、些事しか語ることができず、論理的な「おとこ」に対して、「感情的」「情緒的」と看做されるようになる。

こうした新たな「おとこ」「おんな」の誕生は、とくに、「おとこ」の衣装の変化に反映されることになった。「おんな」の服装はそれほど、大きな変化しなかったのに対して、変化をこうむったのは「おとこ」のそれであった。「おとこ」の衣装は次第に、モノクロ化、性器の隠蔽するようになる。端的な例はそれまで、男性性器への矢印の意味を持っていたネクタイの先の部分が上着によって隠されるようになり、性的機能は大きく後退した。（図3）

図3　「おんな」「おとこ」の差異が大きくなった19世紀半ばの衣装

こうした変化は一見すると、「おとこ」の衣装が性的特徴をなくしユニセックス化したかに見える。だが、フランス革命『人権宣言』の homme が、現実には「人」ではなく、「おとこ」だけを指していることを知ると、「おとこ」＝「人」の代表とされる家父長的構造が構築されたと理解されるべきであろう。つまり、「人」の代表である「おとこ」は、「おとこ」ではなく、「人」でなければいけないのだから、性的特徴を消さなければならないのであった。

近代になってのこうした劇的変化は、農村社会から工業化社会へという産業構造の変化、諸科学による「おんな」と「おとこ」の規定などの背景を持っているが、ここではとくに、近代が、「正常」に対する「異常」、「健康」に対する「病気」といった二元的言説を作り出したとする、『監獄の誕生』などによって主張したミッシェル・フーコーの所説に注目したい。

ただ、問題は、近代における「おんな」「おとこ」が、なぜ単なる並列的な「差異化」ではなく、「人」を代表するまでに特権化された「おとこ」に対して、「おんな」が劣位に置かれるといった「差別化」なのか、ということである。

これに歴史家は、国民国家 (Nation State) の形成とそれに伴う徴兵制が「おとこ」を対象としていたからである、と一応の説明を与える。つまり、国民国家の成立は、「国」を防衛する兵隊を要求する。その兵隊は、それまでの特権的貴族や王権の私的な軍隊ではなく、国民国家を介した公的な関係である。その軍の兵隊は専ら「おとこ」から成っており、「国」のために死ぬ特権を与えられたのは、当面専ら「おとこ」に限られていた。「お国のために」死ぬことが期待された「おとこ」は「一人前」であって、「おんな、子ども」とは区別されることになった。その反対給付となった代表例が参政権である。19世紀のヨーロッパにあって、なぜ、参政権が男性にしか与えられたのかの疑問はこうして判明することになる。逆に女性参政権が認められたのは、国家が国の戦争に貢献したと看做されたときであった。つまり、第一次世界大戦という総力戦体制の中で、「おんな」も戦争に協力したと看做されることによって、参政権を手にしたと考えられるのであった。

こうして、近代における「おとこらしさ」は、兵士との関連抜きには考えられない。たしかに、そういえば、「おとこは泣かない」に代表される近代の「おとこらしさ」は、そのまま、兵士に求められる素養である。そして衣装にしても、ユニセックス化した「おとこ」の衣装は、つまるところ、軍服という終点に行き着くのであった。（図４）また、近代における「男性支配」の源泉を、軍隊という暴力を

「おとこ」が独占していたとことに求めるならば、現代にいたるドメスティック・ヴァイオレンスに代表される男性支配の一つの根源が、暴力であるということが判明することになる。ただ、ポストモダン状況という現時点の中で、近代国民国家が大きく揺らいでいるとすれば、国民国家形成という土台の上に構築された、近代的な「おんな」「おとこ」も揺らぐことになるのである。

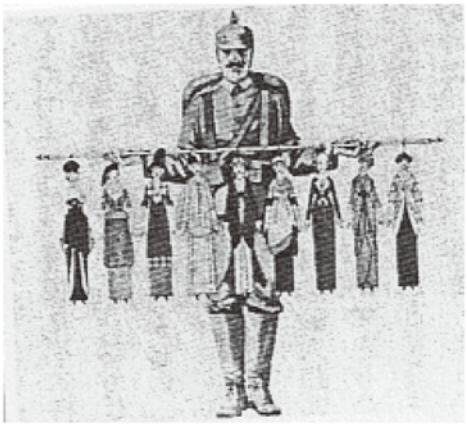

図4　第一次世界大戦中「おとこ」は軍服、「おんな」は多彩なモード